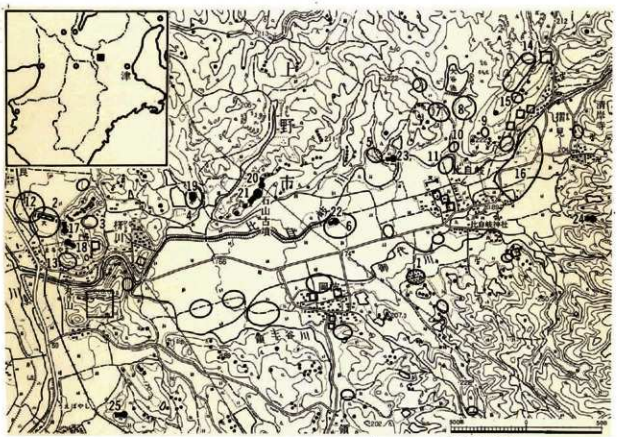
昭和52年度県営圃場整備地域
埋蔵文化財調査報告 2

上野市 比自岐 馬場西遺跡



1　馬場西遺跡　　1～5　包蔵地(弥生)　　5～11　包蔵地(古墳)
12～16　包蔵地(奈良)　　17～24　前方後円墳　　□　城館

図1　馬場西遺跡位置図（1:25000）

1978・3

三重県教育委員会

Ⅰ 前　　言

馬場西遺跡は比自岐神社の西南約500mに位置し、行政的には上野市比自岐字馬場西に属する。現況は水田と畑の古墳時代を中心とする遺物包蔵地である。

昭和52年度県営圃場整備事業上野南部地区の対象地となったため昭和52年7月、事業計画地内の分布調査が県文化財調査員、寺岡光三氏によって実施された。

その結果、当遺跡の存在が確認され、この取扱いについて県農林部および上野耕地事務所と協議したところ、遺跡の範囲、遺構の有無確認を目的とした、4m×2mのグリッド10ヶ所を設ける試掘調査を行なうことになり、10月31日に実施された。

これにより、削平予定地のうち、東方のグリッド(No.1・2)では顕著な遺構・遺物が検出され、馬場西遺跡の中心部と推定される地域が限定された。そこで、遺跡の中心部と推定される2筆の畑を対象に本調査を実施することになった。

本調査は昭和52年12月5日から翌年1月14日まで行なった。この間、遺跡の範囲をさらに明らかにするために、東方と北方に計6ヶ所の補足調査区(A～F)を設定した。調査に際しては、地元土地改良区、上野耕地事務所、工事請負会社等の協力を得た。記して謝したい。

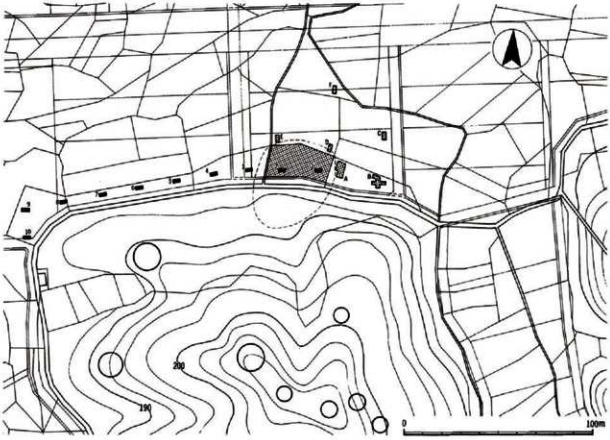


図2　発掘区平面図（1:2000）　網目　本調査区　黒塗　試掘坑　丸印　円墳　A～F　補足調査区　破線　古墳時代の集落想定可能範囲

II 位　　置

馬場西遺跡は上野盆地の一部を構成する比自岐の小盆地に位置する。この比自岐盆地内は、盆地北辺の比自岐川と南辺の領主谷川とが西流し、合っして枡川の谷を過ぎ、木津川(旧長田川)に合流する。当遺跡は、比自岐盆地の南辺丘陵が北に張り出した、その裾部の北面に立地する。

比自岐盆地の黎明期は縄文時代とすべきであろうか。王塚(22)南方の水田中(6)から石鏃が1点表面採集されている。

弥生時代も、馬場西遺跡をはじめ、北方に3ヶ所(3～5)と摺見の北方で若干の遺物が出土している。比自岐盆地の周辺には、後期の集落跡として著名な才良遺跡[1]も存在する。

古墳時代には、石山古墳(21)[2]等の前方後円墳が帆立貝式を含めて6基(19～24)[3]、100基以上の円墳と共に存在する。前方後円墳の分布は偏在し、北辺丘陵に4基存在するが、東辺丘陵と水田中には各1基しか存在せず、南辺丘陵には全く見られない。前方後円墳を仮に1系か多系かを問わず、累代1基築造とすれば、比自岐盆地に一定の完結性を想定可能だが[4]、むろんこれは単純計算にすぎず、今後の研究を期すよりない。

飛鳥時代以降も上寺遺跡(16)等が存在する。仁和寺文書(872年)[5]によれば、貞観寺の比自岐荘が伊賀、阿拝、山田の3郡に存在したが、その名称から、伊賀におけるこの荘園の中枢は比自岐にあったと考えられる。また、天喜4(1056)年の藤原実遠の所領目録[6]からも窺えるように、条里が施行されていた。比自岐盆地はN16°Wの独自なブロックを形成している[7]。清岸寺西方の水田中には「一之井」という古地名も残っており、条里地域への灌漑がここから行なわれたと推定される。式内社である比自岐神社は南面し、条里とは不整合に鎮座する点も興味深い。さらに、神鳳鈔[8]によれば、鎌倉時代初期前後に神宮の比自岐御厨が存在したとされ、多様な勢力の支配が実現されていた事が窺われる。

中世以降は、ほぼ集落ごとに寺院が見られ、丘陵部に墓地が形成されている。清岸寺には鎌倉末葉に比定される特徴的な形式の石仏等[9]も遺存し、豊かな歴史的環境を物語っている。

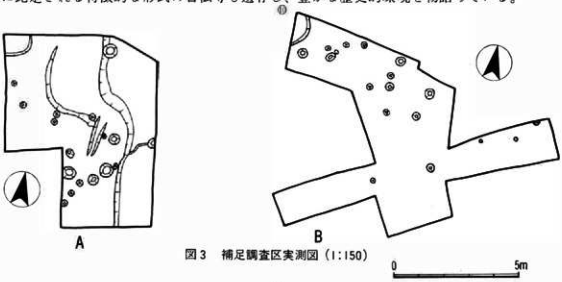


図3　補足調査区実測図(1:150)

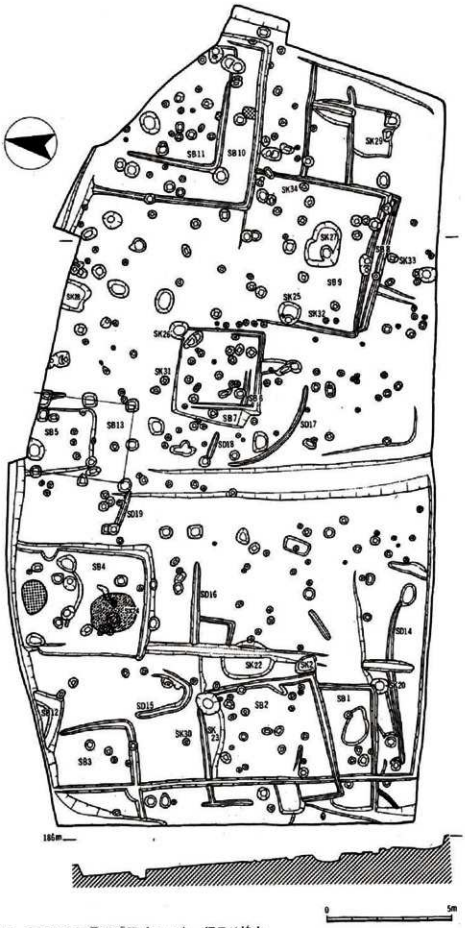


図4　調査区主要部実測図（1:150）　網目は焼土

Ⅲ 遺構と遺物

古墳時代の竪穴住居を中心に、各時代の多様な遺構、遺物が検出された。以下、遺構を中心にしてこれに伴なう遺物を記し、最後に包含層出土の主要な遺物について略記する。

なお、調査区主要部(図4)の中央の南北溝と、ＳＫ21・22を切る南北溝、調査区東縁や北縁西半部の落ち込みは全て畑境の溝である。また、ＳＢ１～３を切る南北溝やこれに続く調査区南縁の東西溝は調査に伴なう排水溝である。補足調査はＡ・Ｂ区以外では遺構が遺存しなかった。

遺構は建物をＳＢ、溝をＳＤ、土坑をＳＫ、墳墓をＳＸの略号で示した。また、遺物はロクロケズリはロクロの回転方向を、ヘラケズリは施す手の回転方向を示した。

1 弥生時代

弥生土器１点(64)とサヌカイト片２点(66～7)、チャート片１点(65)が出土したのみで、遺構は確認されなかった。土器は壺の底部近くかと思われるが詳らかでない。石片は全て人為的な剝離痕を止めるフレイクである。チャートも有り、弥生時代の所産とするには若干の疑問も残るが、縄文土器の出土していない現状では一応弥生時代の遺物としておく。

2 古墳時代

調査区主要部では当遺跡の主要な遺構である竪穴住居をはじめ、土坑や溝等が検出された。調査区主要部は遺跡の中心部に当ると考えられるが、補足調査区や試掘坑には顕著な遺構はない。竪穴住居は全て方形プランを呈し、５世紀後葉から６世紀中葉に営なまれたものである。

表１ 竪穴住居一覧表

遺構名	平面形	規模(m)(東西×南北)	周溝	貯蔵穴	カマド等	重複関係	時期	備考
ＳＢ１	方形	(5.2)×2.3以上	東・南は確認	―	―	ＳＢ２より古	５Ｃ末～６Ｃ初	
ＳＢ２	〃	4.6～4.9 1.0～1.1 5.0～5.3	４辺	東北隅	―	ＳＢ１より新	６Ｃ前半	西中央部は入口か 手捏土器
ＳＢ３	〃	4.0以上×2.8以上	東・南は確認	―	―	―	６Ｃ前葉	削平顕著
ＳＢ４	〃	4.4×(4.1)	西は無	―	北壁	―	７Ｃ後葉	南中央部は入口か
ＳＢ５	〃	2.6～2.8 1.1～1.3 2.3 ×2.6以上	無	(西北隅)	―	―	５Ｃ～６Ｃ初 あるいは７Ｃ前半	柱穴も周溝も無
ＳＢ６	〃	3.3×3.3	北は無	(東北隅)	―	ＳＢ７より新	６Ｃ前葉	小規模
ＳＢ７	〃	2.4以上×3.0	西・北は無 南は有	―	―	ＳＢ６より古	５Ｃ末～６Ｃ初	〃
ＳＢ８	〃	(5.6)×5.8	北は無	―	―	ＳＢ９より古 ＳＢ10より新	６Ｃ前半	ＳＢ9に改築(縮小)前
ＳＢ９	〃	5.9×5.4	〃	―	―	ＳＢ８より新 ＳＢ10より新	６Ｃ中葉	紡錘車
ＳＢ10	〃	6.8×6.6	東・西・南は確認	―	地土(南壁)	ＳＢ８・９より古 ＳＢ11より古	６Ｃ前葉	最大規模
ＳＢ11	〃	5.6×3.6以上	西・南は確認	―	〃	ＳＢ10より新	６Ｃ前半	
ＳＢ12	〃	2.5以上×1.6以上	幅約50cm	―	―	―	５Ｃ後葉～６Ｃ前葉	周溝内に土師器多数 手捏土器

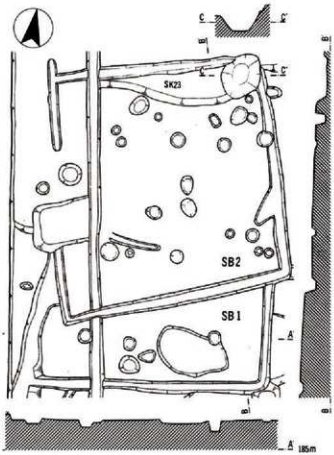


図5　SB1・2等（1:80）

(1) 竪穴住居と出土遺物

ＳＢ１　調査区西南隅に位置し北半部はＳＢ２に破壊されているが、東と南の周溝によって確認された。西南隅は溝状の落ち込みによって破壊されているが、これより西側には周溝は認められず、確認できた南辺長は本来の規模に近いものであろう。東南と西南の柱穴は認められたが他の柱穴や貯蔵穴、カマド等は不明である。床面で浅い土坑が認められたが、地山の単なる汚れの可能性もある。

(101)は確実な伴出遺物だが(102)は浅い土坑の埋土中から出土した。これらは陶邑のＴＫ23からＴＫ47に近似し、５世紀末から６世紀初頭の所産であろう。

ＳＢ２　調査区西南部に位置する、最も遺存状態の良好な竪穴住居である。ＳＢ１より新しく北部は中世のＳＫ23によって削平されていたが、周溝は４辺で確認された。平面形は略方形を呈するが、西壁は東壁よりやや長く、台形気味である。西辺の周溝は中央で切れており、入口と推定される。また西北隅の周溝は北に30cm程張り出しており、排水を考慮したものであろう。床面では多数の小穴が検出されたが、壁から1.4m前後離れた４小穴が柱穴であろう。東北隅には径約80cm、深さ約50cmを測る貯蔵穴が検出された。

貯蔵穴の底部からは高杯蓋の完形品(214)のほか、杯蓋片(210)や土師器の甕(201)等が出土した。また、北周溝底からも土師器の甕(203)や甕(205)が出土し、南周溝中央部底からは(212)が、東北隅の径約40cmの小穴からは(202)が出土した。さらにまた、埋土中からは短脚１段透高杯の小片も出土したが、確実な伴出遺物は総体的に陶邑のＴＫ10に近似する。

なお、この地区の包含層からは紡錘車(60)が出土しているが、ＳＢ２に伴なう可能性もある。

ＳＢ３　調査区の西北隅に位置する。全容を知り得ないが、東と南側の周溝および東南と西南の柱穴が確認された。南壁の長さは、柱穴と周溝の距離から５ｍ足らずと推定される。

床面いっぱいまで耕作によって破壊されており、良好な伴出遺物は得られなかった。出土土器は全て埋土中から出土した小片であり、確かな伴出遺物とは言い難いが、あえて比定すれば陶邑のＭＴ15に近似し、６世紀前葉と考えたい。

ＳＢ５　調査区中央北部に位置し、北壁は畑境の溝によって破壊されている。当遺跡の中で唯一周溝が無く、また、柱穴も不明であり、焼土や炭化物もなく疑問点の多い竪穴である。規模も今回の調査で確認された中で最も小さい。床面で検出された北部中央よりやや西寄りの土坑は貯蔵穴の可能性もある。

出土遺物は全て埋土中の小片であり、確かな伴出遺物はない。(503)は７世紀前半の杯であり、他は５世紀から６世紀初頭のものである。一応、(503)は埋没過程での混入と考えて古墳時代の竪穴としておくが、７世紀前半の可能性もある。

ＳＢ６　調査区中央に位置し、小型の竪穴住居である。ＳＢ７より新しく、周溝は北以外で遺存した。東北隅の一部２段掘りの土坑は深さ27cmを測り、貯蔵穴の可能性もある。床面では多数の柱穴が検出され、壁から１ｍ弱の位置にある４穴が柱穴と推定される。しかしＳＢ６に伴なうかは不確実である。

出土遺物は、全て埋土中であり確実な伴出遺物はない。陶邑のＭＴ15とＴＫ47に近似する２型式の須恵器が混在しており、ＳＢ７より新しいＳＢ６にはＭＴ15近似の遺物が伴なうものであろうか。

ＳＢ７　調査区中央のＳＢ６に破壊されている。周溝は南側だけ検出されたが、少なくとも西と北側は元来存在しなかったものであろう。柱穴は不確実だが、西南以外の３柱穴に比定可能な小穴が存在する。

伴出遺物はないが、ＳＢ６埋土中出土品の内、古い部分（ＴＫ47近似）がＳＢ７に伴なうものと推定される。

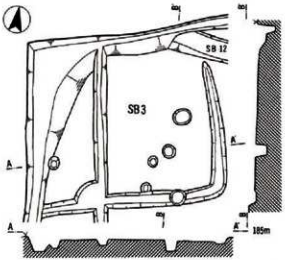


図６　ＳＢ３（1:80）　0　2m

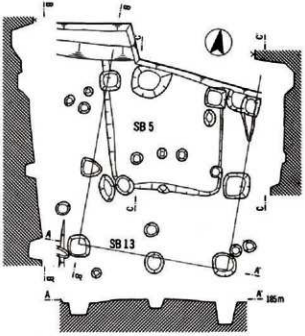


図７　ＳＢ５・13等（1:80）　0　2m

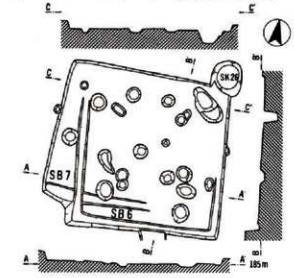


図８　ＳＢ６～７等（1:80）　0　2m

表2　ＳＢ１～３，５～６出土土器一覧表

No.	出土遺構（位置）	器形（質）	大きさ cm	成形・調整技法	胎土	焼成	色調	備考
101	ＳＢ１（南隅溝の内側肩）	杯蓋（須恵）	口径 12.6 器高 4.8	ロクロナデ・ケズリ共順題	砂粒少	良	灰色	小片
102	〃（土坑内）	〃（〃）	口径 13.6	ロクロナデ順題	白色小石	〃	〃	〃
201	ＳＢ２（貯蔵穴底）	甕（土師）	口径 19.2	外面ハケメ(5本/cm) 口縁部ヨコナデ逆題	白色小石 全雲母少	やや脆弱	茶褐色	歪み有 口縁部全残
202	〃（ピット内）	椀（黒色）	口径(11.6) 器高(4.0)	口縁部ヨコナデ	細砂粒少	良	内外共黒色	口縁部少残
203	〃（北溝溝底）	〃（〃）	口径 10.9 器高 6.0	口縁部ヨコナデ逆題 放射状にヘラのアタリ	精良	〃	外 茶褐色 内 黒色	若干欠損
204	〃（埋土中）	ミニチャ（土師）	口径(4.6) 器高(3.4)	手捏	白色小石多	脆弱	褐色	歪み有 口縁部¼残
205	〃（北溝溝底）	小型甕（〃）	口径 10.3	体部外面ハケ(3本/cm)	金雲母等砂粒	良	暗茶褐色	口縁部¼残
206	〃（床面から若干遊離）	杯（須恵）	口径 13.5 器高 5.2	ロクロナデ順題 ロクロケズリ逆題？	白色小石 (～8%)	〃	灰色	外面厚く灰かぶり ¼残
207	〃（埋土中）	〃（〃）	口径 13.9 器高 4.3	ロクロナデ・ケズリ共順題	白色小石多	〃	〃	外面薄く灰かぶり 口縁少残
208	〃（〃）	高杯（〃）	底径 8.6	透し何孔か不明	細砂粒	〃	〃	脚部のみ¼残
209	〃（〃）	〃（〃）	底径 10.9	外面カキメ	砂粒少	やや軟	〃	長方形透は何孔か 不明　小片
210	〃（貯蔵穴とピット内）	杯蓋（〃）	口径 16.9 器高 4.8	ロクロナデ・ケズリ共順題	白・灰・黒色 砂粒少	良	〃	口縁部¼残
211	〃（床面から若干遊離）	〃（〃）	口径(13.6) 器高(4.2)	〃	黒色粒等	〃	〃	外面厚く灰かぶり 小片
212	〃（南隅溝底）	〃（〃）	口径 15.0 器高 4.4	ロクロナデ・ケズリ共順題 ヘラオコシ	砂粒	〃	〃	¼残
213	〃（埋土中）	〃（〃）	口径 16.0 器高 4.5	ロクロナデ・ケズリ共順題 内面乱ナデ	黒色粒少 白・灰色小石多	〃	〃	口縁部少残
214	〃（貯蔵穴内）	高杯蓋（〃）	口径 14.9 器高 6.0	ロクロナデ・ケズリ共逆題	白色小石多	〃	〃	若干欠損
301	ＳＢ３（埋土中）	杯蓋（〃）	口径(15.9)	ロクロナデ順題	白色細砂少	〃	暗灰色	小片
302	〃（〃）	〃（〃）	——	〃	白色小石	〃	〃	〃
303	〃（〃）	高杯（〃）	——	〃	砂粒少	〃	灰色	〃
304	〃（床面から若干遊離）	〃（土師）	——	————	精良	やや脆弱	黄褐色	器表風化
501	ＳＢ５（埋土中）	小型壺（〃）	——	内面ヨコナデ	〃	〃	茶黄色	〃
502	〃（〃）	杯蓋（須恵）	——	ロクロナデ順題 ロクロケズリ逆題	砂粒	良	灰色	小片
503	〃（〃）	杯（〃）	——	ロクロナデ順題？ ヘラオコシ底	〃	〃	灰白色	〃
601	ＳＢ６（埋土上部）	〃（〃）	口径 12.8 器高 5.1	ロクロナデ・ケズリ共順題 内面乱ナデ	〃	〃	淡黄灰色	外面薄く灰かぶり 半分残
602	〃（埋土中）	〃（〃）	口径 12.6 器高 4.7	ロクロナデ・ケズリ共順題	〃	〃	灰色	¼残
603	〃（埋土上部）	〃（〃）	口径(8.9)	ロクロケズリ順題	白色砂粒少	〃	〃	口縁部¼残
604	〃（埋土中）	〃（〃）	——	ロクロナデ順題	砂粒含	〃	〃	小片
605	〃（埋土上部）	杯蓋（〃）	——	ロクロナデ・ケズリ共順題	細砂粒多	〃	〃	歪み有 小片
606	〃（〃）	〃（〃）	口径(15.3)	〃	〃	〃	〃	小片
607	〃（埋土中）	高杯（〃）	——	ロクロナデ順題 正しく３方に長方形透	砂粒含	〃	〃	〃
608	〃（〃）	〃（〃）	——	ロクロナデ順題	黒色微粒	〃	白灰色	長方形透は何孔か 不明　小片
609	〃（〃）	椀（土師）	口径 11.1 器高 4.3	口縁ヨコナデ順題	全雲母微片含	〃	淡橙黄色	¼残
610	〃（〃）	〃（黒色）	口径(11.1) 器高(5.4)	口縁部ヨコナデ 体部外面下半部ハケ(6本/cm)	白色砂粒多	〃	内外共黒色	小片
611	〃（〃）	性格不明品（土師）	長径 4.0	中空	白色小石多	脆弱	黄褐色	一部欠損

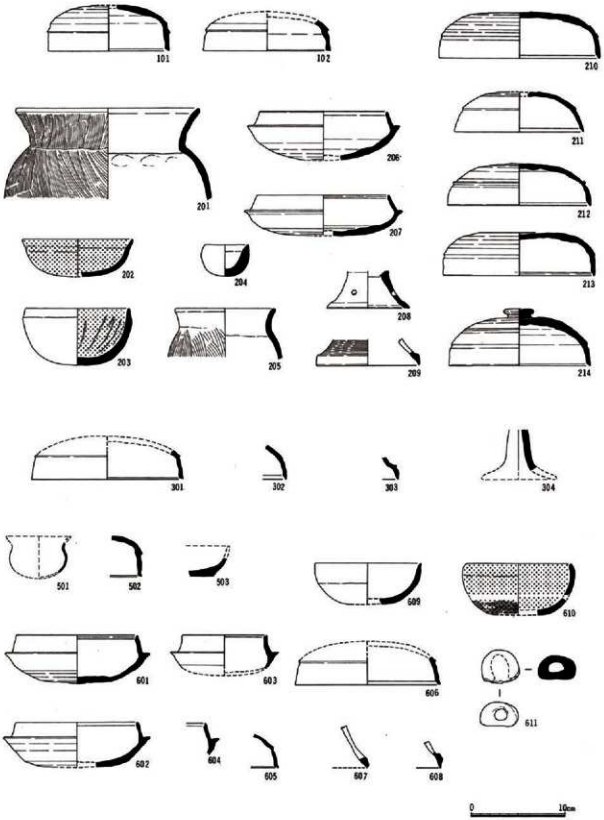


図9　SBI～3、5～6 出土土器実測図（1:4）

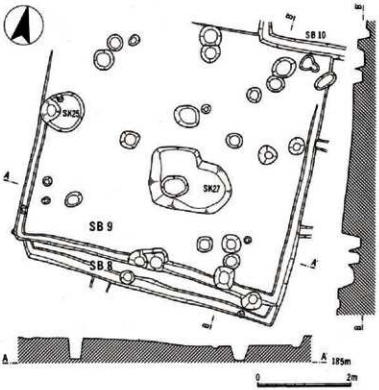


図10　SB8～9等（1:80）

ＳＢ８　調査区東南部に位置し床面はＳＢ９の床面より10cm程高い。ＳＢ９と大きく重復しているため、南周溝以外は不明確である。ＳＢ10の西南隅の西にわずかに遺存した段は、その位置と方向から北壁と推定される。床面では多数の小穴が検出されたが、ＳＢ９の柱穴とは別に、ＳＢ８の柱穴と確実に比定できるものはない。

(802)は確実にＳＢ８に伴なう。これは(203)に類似しており、6世紀前半の所産であろう。このほかに、床面から(1109)に類似する破片も出土した。

ＳＢ９　調査区東南部のＳＢ８と大きく重複している。ＳＢ９やＳＢ８はＳＢ10よりも新しい。一方、ＳＢ９の埋土上面から掘り込まれているＳＫ25やＳＫ27、ＳＫ32は後世のものであろう。ＳＢ９の北部も削平が著しく、北周溝等は遺存しなかった。東周溝の大部分はＳＢ８の周溝と重複しているが、ＳＢ９の周溝の方が若干深い。床面もＳＢ８の床面より10cm程深い。床面では多数の小穴が検出されたが、ＳＢ９の柱穴は壁から１ｍ前後離れて存在する４小穴と推定される。カマドや炉と推定できる焼土や炭化物は検出されなかった。

明らかな伴出遺物は、東周溝の北部で並んで出土した土師器壺(907～８)のみである。しかし、(904～６)も床面から若干遊離しているのみであり、ＳＢ９に伴なう可能性は大いにある。(904)は極めて大きな高杯の蓋である。埋土中出土の紡錘車(910)は斜面が内寄する截頭円錐形を呈す。伴出遺物は総体的に６世紀中葉の所産であろう。

ＳＢ８とＳＢ９は南側以外が極めて良く重複しており、建て替えもしくは部分的改築を想定すべきであろう。このいずれであったかは柱穴が推定の手掛かりとなろう。すなわち、ＳＢ８の柱穴は不明確であるのに対し、ＳＢ９では正方形に配された４主柱が推定できる。特に西南隅で柱穴に比定可能な小穴は明らかに１穴のみである。この事実から屋根組軸部におよぶ建て替えではなく、部分的改築と考えられよう。とすれば、南側の平面規模の拡大か縮小かが問題となるが、ＳＢ８はＳＢ９より古いという事実から縮小したものと理解される。要するに、その南壁や南周溝を造り替え、垂木を短縮させながら６世紀前半から中葉にかけて存続した１棟の竪穴住居のふたつの姿は、ＳＢ８からＳＢ９への部分的改築の結果と理解される。

ＳＢ10　調査区東北部に位置する、最も大規模な竪穴住居である。ＳＢ９や完全に重複するＳＢ11よりも古い。北壁は完全に流失しており北周溝も不明であるが、西北隅では周溝内側の肩がわずかに遺存しており、西周溝の長さが判明した。周溝は４周に巡らされていた可能性が高い。ＳＢ10の床面はＳＢ11の床面より10cm以上高く、ＳＢ11が明らかになるまではベッド状遺構の可能性も考慮させる状態であった。柱穴は東北を除く３ヶ所で確認されたが平面規模と同様に他の竪穴住居の柱穴よりも大きいものである。壁から1.2m前後の位置である。南周溝中央部に接する床面より約５cm高いレベルに焼土が認められた。ここでも周溝は途切れず、埋土中にはやや細長い自然石が２個倒立していた。焼土は薄く広がるのみであり、カマドとするには疑問点が多い。この西側に接っする小穴は径20cm余、深さ10cm程の小さなものである。ここからは１個の自然石と共に杯蓋(1008)が出土したが、ＳＢ10よりも新しい小穴であろう。

(1014～６)はＳＢ10に伴なうものであろう。(1001)が出土した小穴は床面で検出できたものであるが、他のＳＢ10伴出土器より新しい。また、(1017～８)は埋没過程での混入とすべきである。高杯の脚部は４点全てが短脚である一方、杯口縁端部は面を持つとはいえ丸味を帯びている。ＳＢ10は６世紀前葉の所産とすべきであろう。

ＳＢ11　調査区東北部のＳＢ10と完全に重複する。ＳＢ10より10cm余深く、ＳＢ10の床面で初めて検出できた。従って埋土中の遺物はどちらの竪穴住居に伴なうか不明なものも含む。北部は流失しているが、西と南には周溝が巡る。柱穴に比定が可能な小穴は東北以外の３ヶ所で認められた。南周溝中央部に接っして焼土が小範囲に分布していたが、カマドとは考えられない。

(1101・５～７・９)はＳＢ11に伴なうものである。(1101)は腰が張って深いが、口縁端部は丸味が強い。(1105)は特異な形態であるが、蓋の一種と思われる。(1109)は類例がＳＢ８からも出土した。ＳＢ11はＳＢ10よりも若干新しく、６世紀前半の所産であろう。

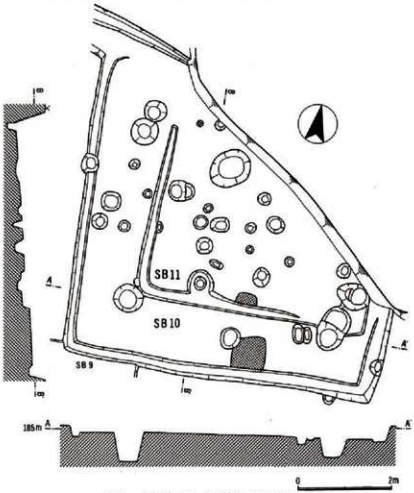


図11　ＳＢ10～11 (1:80) 網目は焼土

表3　ＳＢ８～11出土土器一覧表

No.	出土遺構（位置）	器形（質）	大きさ cm	成形・調整技法	胎土	焼成	色調	備考
801	ＳＢ８（埋土中）	杯蓋（須恵）	——	ロクロナデ須恵	白色小石	良	灰色	小片
802	〃（南周溝底）	椀（土師）	口径 11.3 器高 6.8	口縁部ヨコナデ須恵	白色細粒	〃	茶色	ほぼ完形
901	ＳＢ９（埋土中）	杯蓋（須恵）	——	ロクロナデ逆恵	砂粒	〃	灰色	小片
902	〃（〃）	〃（〃）	——	ロクロナデ順恵	細砂粒	〃	〃	〃
903	〃（〃）	〃（〃）	——	ロクロナデ逆恵	砂粒	〃	〃	〃
904	〃（東周溝耕）	高杯蓋（〃）	口径 17.5 器高 6.8	ロクロナデ・カキメ夫順恵 内面乱ナデ	小石	〃	〃	3/4残
905	〃（床面から若干遊離）	杯（〃）	口径 15.2	ロクロナデ・ケズリ夫順恵	白色粒多	〃	〃	小片
906	〃（東周溝内）	高杯（〃）	口径 10.0	ロクロナデ・ケズリ夫逆恵 ヘラ描斜線列	細砂粒少	〃	〃	杯部のみ半分残
907	〃（東周溝底）	壺（土師）	口径 7.5 器高 10.9	体部外面ハケメ(3本/㎝) 体部内面に縦目	白色小石多	〃	暗茶褐色	完形
908	〃（〃）	〃（〃）	口径 10.8 器高 12.6	体部内外に縦目	白色砂粒 金雲母微片	〃	黄褐色	〃
909	〃（床面から若干遊離）	〃（須恵）	底径 12.0	ロクロナデ・ケズリ夫順恵	砂粒少	〃	灰色	底部1/4残
910	〃（〃）	紡錘車（滑石）	外径 3.8 重量 30g	斜面を縦にケズリ 上から穿孔	良質	——	暗灰緑色	〃
1001	ＳＢ10（南周溝底）	杯蓋（須恵）	口径 15.5 器高 4.8	ロクロナデ・ケズリ夫順恵	小石少	良	灰色	1/4残
1002	〃（埋土中）	〃（〃）	口径 12.6	ロクロナデ逆恵	小石多	〃	〃	小片
1003	〃（〃）	〃（〃）	口径 13.0	ロクロナデ順恵	砂粒	〃	〃	〃
1004	〃（〃）	〃（〃）	口径 14.2 器高(4.6)	ロクロケズリ順恵	精良	〃	黒灰色	1/4残
1005	〃（〃）	杯（〃）	口径 12.4 器高(4.4)	ロクロナデ・ケズリ夫順恵 底部内面乱ナデ	黒色等砂粒	やや軟	灰色	〃
1006	〃（〃）	〃（〃）	口径(15.8)	ロクロ方向不明	小石	良	〃	小片
1007	〃（〃）	杯蓋（〃）	口径 15.1	ロクロナデ・ケズリ夫順恵	砂粒多	〃	黒灰色	〃
1008	〃（南中央部ピット内）	〃（〃）	——	ロクロナデ・ケズリ夫順恵	小石多	〃	灰色	内面薄い灰かぶり 〃
1009	〃（埋土中）	〃（〃）	——	ロクロナデ順恵	小石少	〃	〃	〃
1010	〃（〃）	〃（〃）	——	ロクロナデ逆恵	砂粒少	〃	〃	〃
1011	〃（〃）	〃（〃）	——	〃	砂粒	〃	〃	〃
1012	〃（〃）	高杯（〃）	底径(9.8)	内面シボリ	精良	〃	黒灰色	透孔不明 小片
1013	〃（〃）	〃（〃）	底径 8.5	カキメ	〃	〃	灰色	円形透は何孔か不明 小片
1014	〃（東南部床面）	〃（〃）	底径 9.6	ロクロナデ逆恵、変形透4孔、底部内面乱ナデ	〃	〃	〃	脚部3/4残
1015	〃（埋土中）	〃（〃）	——	内面シボリ 長方形3方透穿孔後カキメ	砂粒少	〃	暗灰色	脚部のみ残
1016	〃（南辺焼土中）	甕（土師）	口径 15.9	内外に縦目	小石 金雲母	やや脆弱	黒褐色	器表風化 小片
1017	〃（埋土中）	杯蓋（須恵）	口径(15.8)	内面乱ナデ	細砂少	良	灰色	外面重焼痕 小片
1018	〃（〃）	椀（黒色）	口径 14.6	ヘラミガキ幅1㎜別 荒い暗文(ジグザグ文)	砂粒 金雲母	〃	黒色	半分残　高台欠
1101	ＳＢ11（南周溝内側耕）	杯（須恵）	口径(13.2) 器高(4.9)	ロクロナデ順恵 ロクロケズリ逆恵	砂粒	〃	灰色	小片
1102	〃（埋土中）	〃（〃）	口径 12.0	ロクロナデ・ケズリ夫順恵	〃	〃	〃	外面薄い灰かぶり 〃

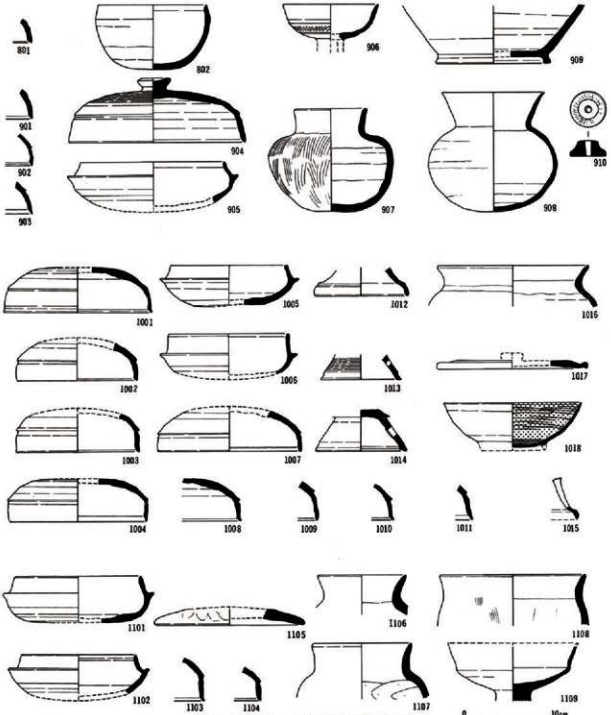


図12　SB8～11 出土土器実測図（1:4）

1103	SB11 （種　土　中）	杯 蓋 （須恵）	—	ロクロナデ逆廻	砂粒	良	黒灰色	小片
1104	〃 （　〃　）	〃 （　〃　）	—	ロクロナデ順廻	小石	〃	灰色	〃
1105	〃 （　〃　）	壺？ （土師）	口径 15.5	外面指圧調整 内面一方向ナデ	金雲母等砂粒	〃	淡茶色	¼残
1106	〃 （床面から若干遊離）	小型壺 （　〃　）	口径（ 9.3）	口縁部ヨコナデ逆廻？ 体部内面ヘラケズリ？	小石多	やや脆弱	暗褐色	器表風化 小石
1107	〃 （　〃　）	〃 （　〃　）	口径(10.4)	口縁部ヨコナデ 体部内面ヘラケズリ	〃	〃	橙黄色	〃
1108	〃 （理　土　中）	甕 （　〃　）	口径 15.3	口縁部ヨコナデ順廻 体部外面ハケの上をタテナデ	小石少	良	黒褐色	小片
1109	〃 （床面から若干遊離）	高 杯 （　〃　）	—	———	白色小石多	脆弱	橙褐色	器表風化 口縁端・脚部共欠損

ＳＢ12　調査区西北部に位置し、畑境の溝や水田造成時の削平によって大部分は破壊されている。遺構は、幅約50cmのＬ字形を呈する溝と、これに囲まれる10cm程低い部分が検出された。周溝としては一般的なものよりやや幅が広いが、一応竪穴住居と判断した。

周溝内からは多数の土師器(1201～８)が出土した。これらは全て一括資料であり、須恵器を含まない。(1206)は体部外面をヘラケズりし、その上をナデてあり、全面にススが付着している。(1207～８)は同巧異大である。これらの所属時期は、当地方における須恵器出現前後の編年が不充分であるため確実でないが、一応５世紀後葉から６世紀前葉の所産と考えたい。

(2)　溝と出土遺物

ＳＤ19　調査区中央部北寄りに位置する溝であり、幅20cm余、深さ５cm足らず､現存長約1.5mを測る。手捏土器(３)が出土した。これは(204)や(1203)に類似する。

(3)　土坑と出土遺物

ＳＫ20　調査区西南部のＳＢ１の周溝東南隅によって破壊されている土坑であり、径約65cm、深さ約20cmを測る。底部から出土した(８)は、古式土師器の比較的新しいものであろう。

ＳＫ21　ＳＢ２の東南に近接する土拡であり、80cm×60cm、深さ約20cmを測る。埋土は、他の古墳時代の遺構と同様に黄褐色粘質土であり、土師器の細片が出土したのみである。

ＳＫ26　ＳＢ６の東北隅を破壊している土坑であり、70cm×60cm、深さ約25cmを測る。土師器の壺(７)の破片が出土した。６世紀代のものであろう。

ＳＫ29　調査区東南部に位置する土坑であり、深さ10cm足らずの不定形なものである。出土土器(６)は６世紀前半に属する。

ＳＫ33　ＳＢ８に南接する小穴である。埋土中から、６世紀前半の須恵器(22)が出土した。

ＳＫ34　ＳＢ９と重複する小穴である。カキメを持つ長脚２段透無蓋高杯(23)と土師器の甕(24)が出土した。(24)は(203、610、802)と同器種である。

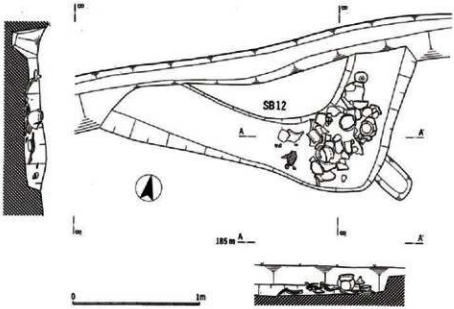


図13　ＳＢ12 遺物出土状況 (1:30) 網目は炭化物

(4)　その他

調査区全域で土坑や溝、多くの小穴が検出された。しかし、良好な遺物も伴なわず､性格不明である。これらの埋土は、明らかな古墳時代の遺構と同様に、黄褐色粘質土系のものが多く、同時代と推定される。

3　飛鳥時代以降

(1)　竪穴住居と出土遺物

ＳＢ４　調査区北部に位置し、北側が削平された竪穴住居である。周溝は東と南には巡るが西には存在しない。東北隅の周溝は北方に延びていた。おそらく、ＳＢ２と同様に排水を考慮したものであろう。西壁は畑境の溝によって大きく破壊されているが、西北隅はかろうじて検出された。推定される北壁の中央部の若干東寄りに焼土が認められた。カマドにふさわしい位置であるが、遺存状況は良好でない。主柱穴はやや南北に長い長方形を呈する位置に４穴認められた。北側の２柱穴に各々接する小穴は補助的な柱穴であろうか。南壁の２ヶ所の小穴はＳＢ４に関係するものと考えられ、主柱穴の南延長上にある事から小屋組軸部に関連する可能性も否定できないが、南北棟で北側にカマドが、南側に入口がそれぞれ付設された竪穴住居を想定し、南壁上の２穴は入口に関する柱穴と考えたい。

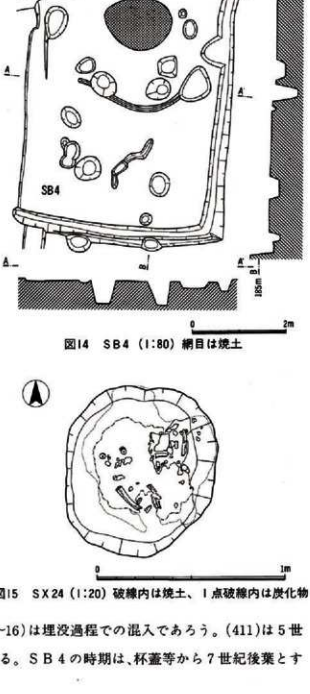


図14　ＳＢ４（1:80）網目は焼土

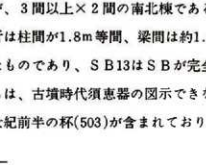


図15　ＳＸ24（1:20）破線内は焼土、Ｉ点破線内は炭化物

(401～５・７～10・13)はＳＢ４の伴出遺物である。杯蓋はかえりを持つ例(410)と持たない例(407～９)とがある。小型の杯は底部内面に乱ナデを施す点は共通するが、口径や口縁部の立ち上り具合等は相異する。(406・11・14～16)は埋没過程での混入であろう。(411)は５世紀後葉の範であり、(414)は奈良時代のものである。ＳＢ４の時期は、杯蓋等から７世紀後葉とすべきであろう。

(2)　掘立柱建物と出土遺物

ＳＢ13　調査区北中央部のＳＢ５(図８)と重複する。当遺跡で確認された唯一の掘立柱建物である。北部は削平されており、南北規模は不明だが、３間以上×２間の南北棟である。柱痕跡は不明だが、棟方向はほとんど磁北に一致する。桁行は柱間が1.8ｍ等間、梁間は約1.6ｍ等間と推定される。ＳＢ13の柱掘方はＳＢ５の埋土を掘ったものであり、ＳＢ13はＳＢが完全に埋没した後に建てられたものであろう。ＳＢ13の柱掘方からは、古墳時代須恵器の図示できない程の細片が出土している。しかし、ＳＢ５の埋土中には７世紀前半の杯(503)が含まれており、ＳＢ13は７

表4　SB12・4，SD16・18～19，SK27・29・26出土土器一覧表

No.	出土遺構（位置）	器形（質）	大きさ cm	成形・調整技法	胎土	焼成	色調	備考
1201	SB12（周溝内）	壺（土師）	口径 19.2	体部内面ヘラケズリ？	砂粒多	やや脆弱	淡黄褐色	体部外面にススロ縁部完形
1202	〃（〃）	〃（〃）	口径 14.3	体部外面ハケメ(8本/cm)体部内面不調整	小石多	脆弱	茶褐色	〃
1203	〃（〃）	ミニチャ（〃）	口径 4.2 器高(4.6)	手捏 黒斑	砂粒不	良	暗灰色	底部欠損
1204	〃（〃）	小型壺（〃）	口径 11.0 器高 10.5	口縁部ヨコナデ	砂粒少	〃	淡黄褐色	外面に薄くススｼﾞ残
1205	〃（〃）	高杯（〃）	底径 8.4	脚内面ヘラケズリ逆廻	〃	〃	黄褐色	脚部のみほぼ完形
1206	〃（〃）	壺（〃）	口径 12.8 器高 17.8	体部外面ヘラケズリ上をナデ？頸部にヘラのアタリ	金雲母等砂粒	〃	〃	外面にススほぼ完形
1207	〃（〃）	壺（〃）	口径 14.0	口縁部ヨコナデ 体部内面に磨目	小石多 金雲母微片	〃	暗赤茶色	体部外面にススｼﾞ点々 口縁部は完形
1208	〃（〃）	〃（〃）	口径 13.8 器高 21.5	口縁部ヨコナデ 体部内外ナデ調整	砂粒多	〃	黄褐色	体部外面にススほぼ完形
401	SB4（西北ピット内）	杯蓋（須恵）	口径 14.2 器高 2.5	ロクロナデ・ケズリ共順廻	小石	軟	灰白色	内面風化 ¼残
402	〃（床面から若干遊離）	〃（〃）	口径 16.4 器高(2.4)	ロクロナデ・ケズリ共順廻 内面乱ナデ	細砂少	良	灰色	½残
403	〃（東周溝内）	杯（〃）	口径 15.0 器高 3.9	ロクロナデ順・ケズリ逆廻 底部内面乱ナデ	〃	〃	〃	口縁部少残
404	〃（埋土下部）	〃（〃）	口径 12.9 器高 3.5	ロクロナデ順廻、ヘラオコシ、底部内面乱ナデ	黒色粒	〃	灰白色	半分残
405	〃（床面から若干遊離）	〃（〃）	口径 11.2 器高 3.7	ロクロナデ順廻 ロクロケズリ逆廻	灰色石	軟	〃	口縁部少残
406	〃（床面）	杯蓋（〃）	口径 10.0 器高 3.1	ロクロナデ順廻 ヘラオコシ	細砂少	良	灰色	口縁部少残
407	〃（〃）	〃（〃）	——	ロクロケズリ逆廻 内面乱ナデ	〃	〃	〃	歪み有 小片
408	〃（埋土下部）	〃（〃）	——	ロクロケズリ順廻	砂粒	やや軟	黒灰色	小片
409	〃（東周溝内）	〃（〃）	——	〃	細砂粒	〃	灰白色	〃
410	〃（埋土下部）	〃（〃）	——	ロクロナデ・ケズリ共順廻	細砂粒少	良	灰色	〃
411	〃（〃）	甕（〃）	口径 12.5	ロクロナデ順廻	砂粒	〃	〃	口縁部のみ¼残
412	〃（埋土中）	壺（土師）	口径(15.4)	口縁部ヨコナデ	雲母等砂粒	〃	黄褐色	小片
413	〃（埋土下部）	〃（〃）	口径(18.0)	————	白色小石多	〃	暗褐色	器表風化 小片
414	〃（埋土上部）	杯（〃）	口径 15.9 器高 2.7	————	細砂粒	やや脆弱	桃褐色	¼残
415	〃（〃）	瓶（瓦器）	口径 15.2 器高 4.5	内面ヘラミガキ（幅1％強）密	精良 灰白色	良	黒色	暗文は連弧文？ ¼残
416	〃（埋土下部）	高杯（土師）	底径 10.7	組み合わせ成形技法 内面ヘラケズリ順廻	金雲母等砂粒	〃	黄褐色	脚部のみ残
1	SD16（埋土中）	杯（須恵）	口径 11.0 器高 3.7	ロクロナデ順廻 ヘラオコシ	黒色粒多	軟	黄灰色	歪み有 ¼残
2	SD18（〃）	瓶（瓦器）	口径 14.3 器高 4.7	暗文幅約1％	細砂少	良	胎土は黄白色	風化著しく暗文等不明 ¼残
3	SD19（〃）	ミニチャ（土師）	口径 4.5 器高 4.3	手捏	白色小石多 金雲母	〃	茶褐色	完形
4	SK27（〃）	杯蓋（須恵）	——	ロクロナデ順廻	小石少	〃	灰色	小片
5	〃（〃）	鉢？（土師）	——	————	小石多	脆弱	黄土色	志摩式製塩土器 口縁部と底部欠損
6	SK29（〃）	杯蓋（須恵）	口径(16.8) 器高(4.7)	ロクロナデ・ケズリ共順廻	〃	良	灰色	小片
7	SK26（〃）	壺（土師）	口径(9.0) 器高(12.0)	内外に磨目	白色小石少	〃	橙褐色	器表風化 口縁部と底部欠損

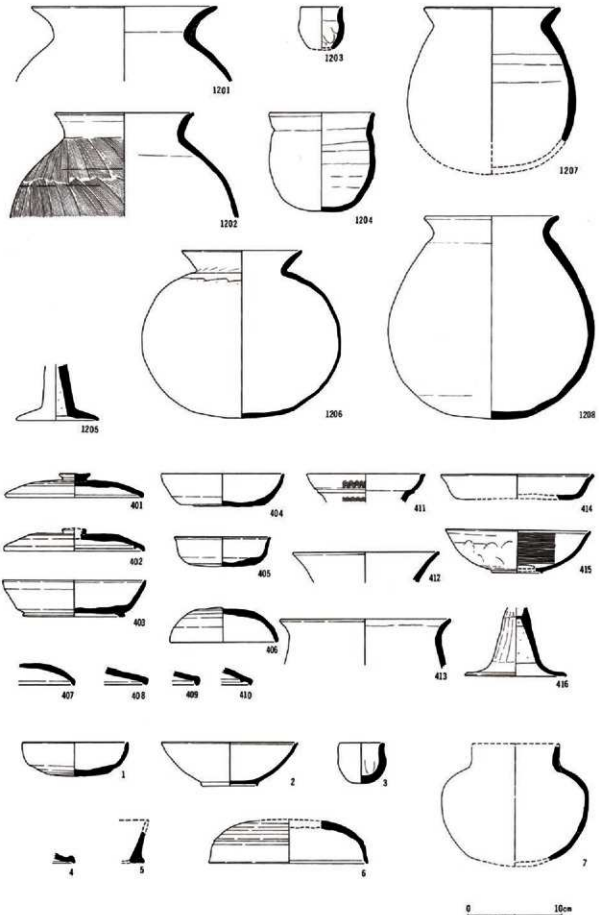


図16　SB12・4、SD16・18～19、SK29・26 出土土器実測図（1:4）

表5　ＳＫ20・22～23・30～34・補足調査区Ａ出土土器一覧表

No.	出土遺構（位置）	器形（質）	大きさ cm	成形・調整技法	胎土	焼成	色調	備考
8	ＳＫ20 底	高杯（土師）	口径 15.0	――――	白色小石多 金雲母	良	茶褐色	器表風化 脚部欠損
9	ＳＫ22（種土中）	皿（〃）	口径(8.0) 器高 1.8	口縁部ヨコナデ 底部荒任調整	白色小石 金雲母	〃	橙褐色	歪み有 口縁部¼残
10	〃（〃）	埴（瓦器）	底径 5.7	暗文幅１%強 高台の作りは丁寧	精良	〃	胎土は黄白色	暗文は連続輪状文か　底部小片
11	〃（〃）	〃（山茶椀）	底径 6.3	内面厚く灰かぶり	〃	〃	灰色	高台部剥落 歪み有 底部剥彫 口縁部欠損
12	〃（〃）	釘（鉄）	全長 7.0	頭部は折り曲げ	――	――	――	錆化 変形
13	ＳＫ23（〃）	埴（瓦器）	――	内面ヘラミガキ幅１%弱 外面ヘラミガキ不明	精良	良	胎土は黄白色	イブシかからず 小片
14	〃（〃）	皿（〃）	口径 7.8 器高 1.3	暗文幅広(約1.5%) 口縁端形に沈線なし	〃	〃	〃	歪み少し有 小片
15	〃（〃）	埴（術椀）	高台径6.4	軸は厚く不透明な灰緑色 削出高台 ロクロケズリは逆回	白茶色微粒	〃	胎土は白色	高台まで釉は流下 底部のみ完形
16	〃（〃）	杯蓋（須恵）	口径(15.6)	ロクロナデ順回	砂粒	〃	灰色	小片
17	〃（〃）	壺（土師）	口径 18.4	ハケメ(4本/cm)	白色小石多 金雲母	〃	茶褐色	口縁部¼残
18	ＳＫ30（〃）	皿（瓦器）	口径 8.9 器高 1.6	乱ナデの上に暗文（幅約１%）	精良	〃	灰色	歪み有 ほぼ完形
19	ＳＫ31（〃）	性格不明品（土師）	外径 2.8	体部に挿入したものか	白色等小石多	〃	赤褐色	中空 把手状部のみ残
20	〃（〃）	杯（須恵）	口径 16.0 器高 4.4	ロクロナデ順回	小石多	〃	灰色	高台ノ残
21	ＳＫ32（〃）	埴（瓦器）	口径 15.7 器高 5.5	暗文(幅約１%)は連続輪状文か	精良	〃	胎土は灰白色	内面ヘラミガキは密　口縁部少残
22	ＳＫ33（〃）	杯（須恵）	口径 14.3 器高 4.5	ロクロナデ・ケズリ共順回	小石少	〃	灰色	¾残
23	ＳＫ34（〃）	高杯（〃）	底径 8.8	ロクロナデ逆回　カキメ　３方透	〃	〃	〃	脚下半部のみ完形
24	〃（〃）	埴（土師）	口径 11.6	――――	小石多	脆弱	暗褐色	器表風化 小片
25	補足調査区Ａ（暗褐色砂質土）	高杯（〃）	口径(16.0) 器高 13.7	円盤充填組み合わせ成形技法	金雲母等砂粒多	良	淡灰茶色	歪み有　脚部欠 杯部½残
26	〃（〃）	杯蓋（須恵）	口径(11.6) 器高(4.5)	ロクロナデ・ケズリ共順回	小石多	〃	灰色	小片
27	〃（〃）	杯（〃）	――	〃	小石	〃	〃	〃
28	〃（清・理土中）	杯（〃）	底径 8.3	ロクロナデ逆回　カキメ	砂粒少	〃	〃	円形遠は３孔か 脚部のみ¾残
29	〃（暗褐色砂質土）	壺（土師）	口径 18.5	ハケメ(3本/cm)は浅い 口縁部ヨコナデ	金雲母等細砂多	〃	淡茶色	口縁部のみ半分残
30	〃（〃）	埴（黒色）	口径 17.0 器高 3.9	外面ヘラケズリ 内面ヘラミガキ	雲母等細砂粒	〃	暗茶色	内黒の黒色土器 口縁部は少残
31	〃（床土）	杯（須恵）	底径(11.4)	ロクロナデ逆回 底部内面乱ナデ	精良	〃	白灰色	歪み有 小片
32	〃（暗褐色砂質土）	〃（〃）	口径 13.2 器高 3.3	ロクロナデ順回 ヘラオコシ	小石	〃	〃	小片
33	〃（〃）	蓋受蓋（〃）	口径 16.2	ロクロケズリ順回 内面乱ナデ	砂粒少	〃	灰色	口縁端に剥離痕 上面灰かぶり　¾残
34	〃（床土）	杯蓋（〃）	口径 13.6	ロクロナデ・ケズリ共順回 内面乱ナデ	小石多	〃	〃	小片
35	〃（暗褐色砂質土）	〃（〃）	口径(13.8)	〃	砂粒少	〃	〃	外面に厚い灰かぶり　小片
36	〃（〃）	〃（〃）	口径 15.8	ロクロナデ順回	小石	〃	〃	〃
37	〃（〃）	〃（〃）	――	〃	白色小石等	〃	〃	〃
38	〃（〃）	〃（〃）	――	ロクロナデ・ケズリ共順回	細砂	〃	〃	〃
39	〃（〃）	皿（〃）	口径 19.3 器高 1.8	ロクロナデ順回 内面乱ナデ	精良	やや軟	〃	〃

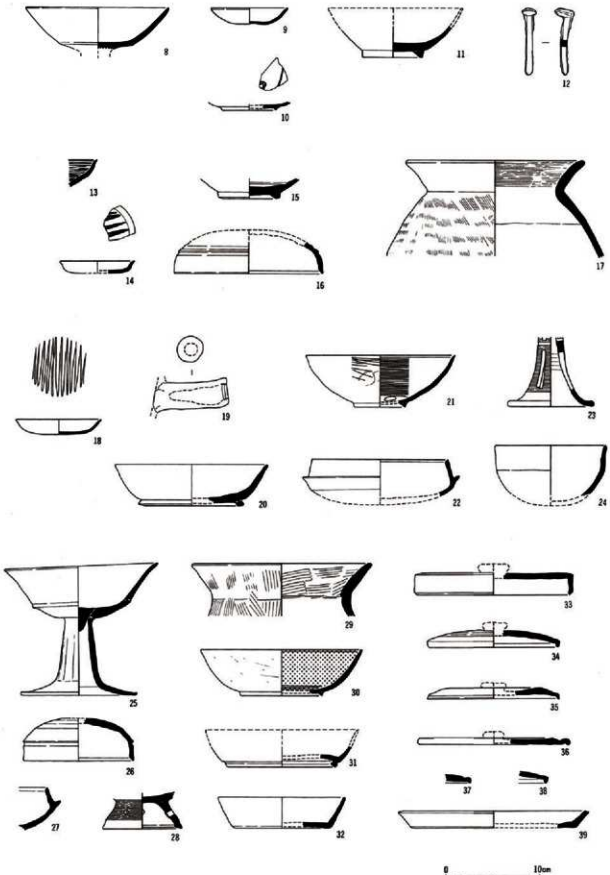


図17　SK20・22～23・30～34・補足調査区A出土土器実測図（1:4）

表6　補足調査区F・調査区主要部 包含層出土土器一覧表

No.	出土遺構（位置）	器形（質）	大きさ(cm)	成形・調整技法	胎土	焼成	色調	備考
40	F区（床　土）	埦（緑釉）	底径 5.6	釉は薄く淡緑色 平底か	細砂	軟	胎土は白灰色	磨滅著 小片
41	D区（〃　）	〃（青磁）	底径（5.4）	釉は黄灰色	精良	〃	〃	小片
42	F区（〃　）	——（古瀬戸?）	——	釉は茶色でナデしが見られる	細砂	〃	胎土は灰色	〃
43	D区（〃　）	杯（須恵）	口径 13.0 器高（4.9）	ロクロナデ・ケズリ共順題	小石	〃	灰色	外面に薄く灰かぶり 口縁部半残
44	調査区主要部（〃　）	皿（緑釉）	口径(12.8) 器高 2.1	釉は全面に薄く淡緑色 蛇目高台か	良	〃	胎土は灰色	3片を図上復元
45	〃（〃　）	杯（須恵）	口径 12.1 器高 5.1	ロクロナデ・ケズリ共順題	小石多	〃	灰色	歪み有 外面に薄く灰かぶり 口縁一部欠損
46	〃（〃　）	高杯（土師）	底径 9.2	脚柱状部外面タテナデ 内面ヘラケズリ 2孔	金雲母微片	〃	橙褐色	脚柱状部のみ残
47	〃（〃　）	皿（〃）	口径 10.6 器高 1.6	底部に糸目痕 口縁部ヨコナデ	白色小石多	脆弱	外黒色 内淡黄褐色	器表風化 ほぼ完形
48	〃（〃　）	壺（須恵）	口径(13.0)	ロクロナデ逆題	小石	良	灰色	歪み有 口縁部のみ残
49	〃（〃　）	杯（〃）	口径 11.3 器高 3.5	ロクロナデ順題 ヘラオコシ	〃	〃	〃	口縁部は¼残
50	〃（〃　）	杯蓋（〃）	——	ロクロナデ・ケズリ共順題 内面乱ナデ	白色小石	〃	〃	口縁部少々残
51	〃（〃　）	〃（〃）	——	ロクロ方向不明 内面乱ナデ	小石	〃	〃	口縁部欠損
52	〃（〃　）	〃（〃）	口径 16.3	ロクロ方向不明	細砂	やや軟	〃	口縁部¼残
53	〃（耕　土）	小型埦（瓦器）	口径 9.2 器高 2.4	暗文は連続輪状文か ヘラミガキ幅は1%強	精良	良	胎土は灰白色	小片
54	〃（床　土）	皿（〃）	口径（9.0） 器高 1.5	暗文幅は1%弱 口縁部ヨコナデ	〃	〃	〃	イブシは薄 ほぼ完形
55	〃（〃　）	〃（〃）	口径（9.5） 器高 1.5	暗文幅は1%強 口縁部ヨコナデ	砂粒少	〃	〃	歪み有 全面にイブシ ほぼ完形
56	〃（〃　）	埦（〃）	口径(14.9) 器高 4.4	暗文(幅1%弱)は細約した連続輪状文	〃	〃	〃	〃
57	〃（〃　）	〃（〃）	口径 15.2 器高（4.1）	暗文(幅1.5%)は連続輪状文か	〃	〃	黄白色	全面にイブシ ¼残
58	〃（〃　）	〃（〃）	口径(15.0) 器高 4.5	暗文(幅約1%)は連続輪状文か	精良	〃	〃	半分残
59	〃（〃　）	羽釜（土師）	口径 26.6	ツバの下はヘラケズリ	砂粒多	〃	茶褐色	内面に炭化物付着 ¼残
60	〃（〃　）	紡錘車（滑石）	外径 4.1 重量 23g	上面は研磨、下面は擦痕 側面はケズリ	良質	——	暗灰緑色	完形
61	〃（〃　）	鉢?（土師）	——	粗製	砂粒多	脆弱	淡黄褐色	いわゆる志摩式製塩土器 器表風化　小片
62	〃（〃　）	〃（〃）	——	〃	〃	〃	橙褐色	〃
63	〃（〃　）	〃（〃）	——	〃	〃	〃	茶褐色	〃

世紀前半以降の所産と考えられる。

(3)　溝と出土遺物

ＳＤ16　ＳＢ４の南に位置する東西溝であり、幅約30cm、深さ約10cm、現存長約3.2ｍを測る。小型の杯(１)が出土した。７世紀前半の所産であろう。

ＳＤ18　調査区中央のＳＢ７の西に位置する溝であり、幅約20cm、深さ数cm、現存長1.1ｍを測る。瓦器埦(２)が出土したが器表の風化が著しい。平安時代末の所産であろう。

(4)　土坑と出土遺物

ＳＫ22　調査区西部のＳＢ２の東に位置する浅い土坑である。土師器の小皿(９)や瓦器埦片(10)と共に伊賀では珍しい山茶埦(11)や、頭部を折り曲げた断面長方形の鉄釘(12)等が出土した。平

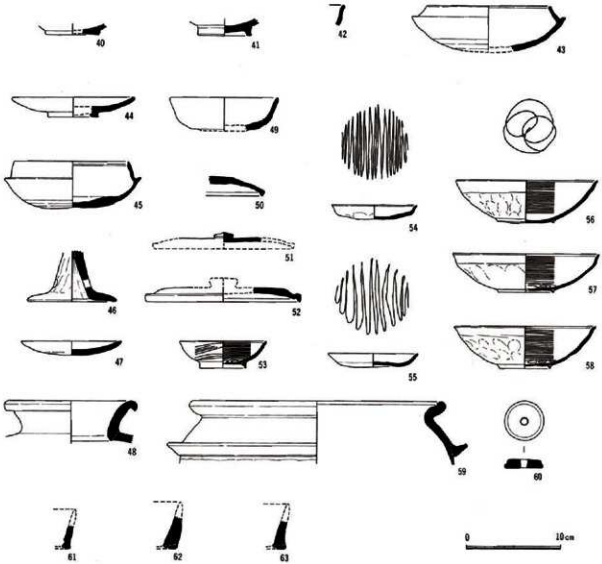


図18　補足調査区F・調査区主要部包含層出土土器実測図（1:4）

安時代末の所産であろう。

ＳＫ23　調査区西部のＳＢ２を破壊している土坑である。削平が著しく、現状ではＳＫ22・23は別個の土坑と見えるが、元来は一体の不定形な土坑であった可能性が高い。古墳時代の須恵器(16)も含むが、平安時代末のものを中心とする。(15)は青磁椀であり、不透明な灰緑色の釉が厚く施されている。輸入品であろう。

ＳＫ25　ＳＢ９の埋土上面で検出された径約40cm、深さ10cm余の土坑である。底部には焼土が認められた。土製の鋳型かと思われる細片(73～4)が炭化物と共に出土した。金属加工に関係する遺構の可能性もあるが、時代は６世紀中葉のＳＢ９より新しいと言い得るのみである。

ＳＫ27　試掘調査の際に確認された土坑であり、ＳＢ８・９の埋土上面から掘り込まれている。1.8m×1.1m、深さ45cmを測り、西南部はピット状に一段低くなっている。埋土中から奈良時代と推定される杯蓋片(４)と共に、いわゆる志摩式製塩土器片(５)が出土している。しかし、両者

共1点ずつの小片であるため、志摩式製塩土器が奈良時代の所産であるとは即断できない。

ＳＫ30　調査区西部に位置する、径25cm程の小穴である。埋土から出土した瓦器皿(18)は、口縁端部に沈線を欠き、ジグザグ文の暗文を止めている。

ＳＫ31　調査区中央のＳＢ７より北に位置する、径約30cmの小穴である。杯(20)等が出土した。

ＳＫ32　ＳＢ９の埋土を掘り込む、径約20cmの小穴である。出土した瓦器埦(21)は、断面三角形を呈する高台を持ち、連続輪状文の暗文を止める。12世紀の所産であろう。

(5) 墳　　墓

ＳＸ24　調査区西北部のＳＢ４埋土上面で検出された土坑であり、90cm×80cm、深さ10cm余を測る(図16)。土坑内壁は焼土化し、１体分の火葬骨が炭化物とともに検出された。人骨は遺存状態が悪く性別等は不明だが、北首西顔させた右側臥屈葬と推定される。釘は出土せず、掘方が円形である点から桶を利用したものであろう。顔面前方、すなわち、膝の上には６枚の銅銭(76)が遺存した。火を受けたため、極めて脆弱になっており、鋳造年代はもとより、その種類も不明であり、直接時代を知り得ないが中世後期から近世初期に属しよう。

(6) 包含層出土遺物

補足調査区Ａの包含層である暗褐色砂質土中からは、古墳時代と奈良時代を中心とする多様な土器(25～39)が出土した。(25)は杯部と脚部の接合技法等が観察できる好資料である。(25～28)は５世紀後半から６世紀前半に属しよう。奈良時代の須恵器(31～39)の内には薬壺の蓋(33)も含まれる。平安時代前期の黒色土器Ａ(30)は、口縁端部に沈線を持ち、底部内面には暗文かとも考えられるヘラミガキがかすかに認められる。

補足調査区Ｄ・Ｆは顕著な遺構もなく出土遺物(40～43)も少ないが、その内容は多様である。(40)は緑釉埦である。軟質で細砂粒を含む白灰色の胎土に、淡緑色の釉が薄く施されている。(41)は青磁埦である。灰白色を呈する硬質で精良な胎土に黄灰色の釉が施されている。(42)は古瀬戸と思われる小片である。これと共に同様な釉調の香炉片(75)等も出土している。

調査区主要部の包含層からも多様な遺物(44～74)が出土した。(44)は緑釉の皿である。硬質で砂粒をほとんど含まない灰色の胎土の全面に淡緑色の釉が薄く施されている。蛇目高台と推定される。(48)は14世紀頃の壺である。蔵骨器の可能性もあろう。(53)は瓦器小埦である。しっかりした高台を持ち、全体に丁寧な作りである。(54～５)は瓦器皿である。器形全体の相違のほかに、口縁端部の沈線の有無や同じジグザグ文の暗文でも微妙な相違がある。(56～８)は瓦器埦である。(58)は比較的しっかりした高台を持つに対し、(56)は底を支えられない程低い高台であり、暗文も極めて簡略化された連続輪状文である。これらは12世紀代における型式差であろう。(59)は大和に類例が求められる羽釜である。平安時代末から鎌倉時代初めの所産であろう。(61～３)はいわゆる志摩式製塩土器である。破片は合計で70点程出土しているが、いずれも小片であり、図上復元はもとより、図示できるものも少ない。

また、(77)は南の畑で表面採集された鉄滓である。鋳型状土製品(73～４)と共に興味深い。

Ⅳ 結　　語

今回の馬場西遺跡の発掘調査は、県営圃場整備事業に先立つものであったため、調査としては多くの制約があった。しかし、それなりに多くの事実が明らかになった。それは、さらに多くの問題点を提起したわけでもある。

1　遺物の特徴

ケズリ技法は、伊賀においても庄内式併行期以後しばしば見られる。馬場西遺跡出土品中にも類例が含まれる。(1107)や(1206)には、それぞれ内・外面に施されている。特に(1206)は外面をケズリ、その上をナデているらしい点が特徴的である。(1106)も内面ケズリの上をナデている可能性が高い。東海地方では、比較的新しい小型丸底壺等を除いてケズリ技法は一般に見られない。これに対して、畿内等では一般的な技法であり、伊賀も基本的にはこの地域に包括されよう。しかし、伊賀周辺では、ケズリを施す部分が畿内とは異なったり、その上をナデる場合もある点が特色といえよう。

須恵器は奈良時代まで含めても当遺跡では100点に満たず、小片が多い。しかし、一応観察可能なものについてはロクロの回転方向等に注意した。その結果、5世紀末から6世紀前葉では多くがロクロを順廻りに回転させ、以後はさらに順廻りの比率が高まる。しかし、7～8世紀になっても逆廻りの例は少々残る。また、各時期を通じて、ケズリとナデではロクロの回転方向が異なる例が1割弱見られる。集落から出土する須恵器は複数の窯から供給された可能性が高く、その実態は単純ではなかろう。消費地での検討の場合、胎土や混入物、技法、形態等による分類も大切と思われるが、馬場西遺跡においては資料的制約も大きく、検討できなかった。しかし、陶邑と比較すると、概して杯蓋は口縁端面の変化に対して稜は後まで残る例が多い等の傾向を持つようである。また、胎土に石英や長石と思われる白色の小石を混入したものも見られた。

黒色土器(202～3、610)が6世紀前半から出現している点は注目される。(203)はほぼ完形の黒色土器Aであり、(202、610)はBであるらしいが小片であり不確実である。3点共ヘラミガキは不明であるが(203)の内面には放射状のヘラのアタリも見られる。器形は3点共埦であり、須恵器の杯身や蓋を模したものとは考えられない。同様な器種で黒色化されない例(609、802、24)もある。当遺跡出土品中では、平安時代のA(1018、30)は有るがBは無い。伊賀においては一般的にBは稀なようである。大和等では8世紀後半にAが出現し、やがてBも見られるようになり、遂には瓦器生産技術が成立するというスムーズな展開を遂げる。一方近江では瓦器は一般化せず、Aが主体であり続け、Bはほとんど見られないという。これに対し、6世紀前半にすでに黒色土器が出現しており、奈良、平安時代においてBが少ないが後に瓦器分布圏に属する点は伊賀における特徴的な現象であろう。

製塩土器(5、61～3、68～72)の出土は山国である伊賀での初見である。これらは、いわゆる

志摩式製塩土器であるが、その後同じ上野市内の下郡遺跡[17]でも確認された。奈良時代に属す可能性もあるが確定的ではなく、やはり平安時代の所産であろうか。この種の土器は確かに製塩と密接に関係するが、単に煎熬段階だけでなく精製段階までも含めて具体的な使用法が明らかにされなくてはならない[18]。また、この分布範囲は志摩地方を中心に伊勢、そして伊賀を加えたわけだが、その存続期と共に生産と流通の実態を明らかにする事が今後の重要な課題であろう[19]。

緑釉陶器(40、44)の出土も伊賀においては田中遺跡[20]に次ぐ希少な例である。その後の下郡遺跡出土例は全般に濃緑色を呈するのに対して、当遺跡出土例は淡緑色を呈する。

瓦器も出土したが、量的には多くはない。「大和の瓦器は他地域のものに比べて器肉が薄く、断面による観察では淡灰白色で水漉した均一な粘土から成り、砂粒を全く含んでいないのも顕著な特徴の一つ」であり、口縁端部内面の沈線は「大和以外の地域では省略されているものが多くまた他地域では早く消失する傾向がみられる」という[21]。しかし、伊賀の瓦器も器肉が薄く、口縁端部内面の沈線も少なくとも埴については大和と同様な傾向を持つようである[22]。だが、大和ではしばしば見られる火襷が伊賀では未確認であり、胎土も相違する例もある。また、伊賀の瓦器は燻化の不充分な例は見られるが、その部位は体部や口縁部の1ヶ所であり、口縁部に一対という例は未確認である。成形、調整技法と共に焼成技法も合せて、地方色等を注意してゆきたい。

2　集落の形成

「位置」の項でも若干触れたように、比自岐盆地における弥生時代の実態は不明な点が多い。しかし、古墳時代に入ると、全長120mを測る石山古墳を始めとして多くの古墳が築造された。石山古墳は、その規模を周辺の古墳と比較するとひときわ大きく、単に比自岐の小盆地のみをその基盤として成立したものとは考え難い。しかしその後は、比自岐盆地内にも数十mの前方後円墳は築造され続けたらしい。数十mの前方後円墳は才良付近にも存在しており、各々が一定程度独立した社会単位を構成していた可能性はあろう。さらに、比自岐盆地内の古墳の分布に注目すると、前方後円墳が1基も知られていない南辺丘陵部に対して、4基の前方後円墳の存在する北辺丘陵部の優位性が窺われる。こうした現象に包蔵地の分布密度も対応しているようである。南辺に立地する馬場西遺跡も、5世紀中葉以前は遺構や遺物の希少な事実から生活圏に属してはいても居住地としては利用されていなかったと想定される。

集落の形成は6世紀前半を中心に、5世紀後葉からであろう。竪穴住居は北側が削平されている場合が多いが、全て方形プランを呈し、周溝が基本的に4辺を巡る。ＳＢ10やＳＢ11の南壁寄りに焼土が分布していたが、古墳時代の竪穴住居でカマドの明確な例が無い事はひとつの疑問点であった。貯蔵穴も明確なものはＳＢ２の東北隅に存在したものだけである。同様の傾向は、馬場西遺跡の西北西4km足らずに位置する下郡遺跡・法専寺地区のほぼ同時期の竪穴住居群にも窺える。これに対して北堀池遺跡[23]では、従来約半数の竪穴住居の隅に設けられていた貯蔵穴が5世紀末のカマドの出現とその一般化と共に、貯蔵穴もほとんど全ての竪穴住居に設けられるようになる。このように、同じ伊賀地方でも遺跡間に相違が見られ、あるいはカマドの出現、普及の時

表７　古墳時代竪穴住居の規模

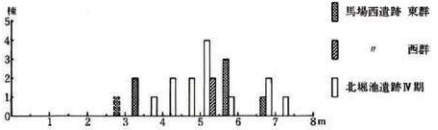


表８　古墳時代竪穴住居の群構成

	群	小グループ	6C　　7C	備　考
ＳＢ１	西	a		手捏土器（紡錘車）
〃 2				〃
〃 12		b		
〃 3				
〃 5	東	c		あるいは7C前半か
〃 7				小規模
〃 6				〃
〃 8		d		改築　紡錘車
〃 9				
〃 10		e		
〃 11				

期は同一地方でも何らかの社会集団間に跛行性が存在したのかもしれない。貯蔵穴の実態にも同様な社会的要因があった可能性は高かろうが貯蔵穴等と共に、竪穴住居の規模も注目に値しよう。表７は、馬場西遺跡の古墳時代竪穴住居と北堀池遺跡のほぼ同時期(Ⅳ期)の竪穴住居の一辺長を比較したものである。表に見る通り、北堀池遺跡では４～５ｍを中心に７ｍ前後の例もあるが、馬場西遺跡では５ｍ以上と３ｍ前後とに２分される傾向がある。傾向の偏よりは例数の少なさに起因するとも考えられようが一応注目すべき現象であろう。この現象を合理的に説明できる用意はないが、密接に関係するであろう集落の構成について以下に若干の考察を試みよう。

まず、各々の竪穴住居の存続期を問題とすべきであろう。占地を考慮して存続期を模式化したものが表８である。試掘調査や補足調査の結果と、地形や遺物の散布状況から古墳時代集落の広がりを推定すると、調査区主要部の東西と北には、もう少し広がるのみだが、南方には山際までの広がりが推定できる(図２)。したがって、調査は集落跡の主要部におよんでおり、この竪穴住居群は次のような理解が可能であろう。すなわち東西２群に大別され、さらに西群はａ(ＳＢ１・２)、ｂ(ＳＢ12・３)、東群はｃ(ＳＢ５？・７・６)、ｄ(ＳＢ８・９)、ｅ(ＳＢ10・11)に細分されよう。この小グループを構成する個々の竪穴住居は同時存在ではなく、継起的な小世帯であろうか。東西２群間には、南に広がる空地が存在したとも考えられる。東西２群の各々は、いわゆる世帯共同体[8]に比定可能でもあろう。しかし、全体で１群とも考えられ、今回の調査だけでは即断できない。東西２群を仮定しても、両者間には特に格差を想定できるような遺物はないが、竪穴

住居の平面規模が西群の５ｍ程に対して、東群は６ｍ前後と３ｍ前後とに両極分解している点は注目される。

一般論として、５世紀に農業生産力が飛躍的な向上を遂げ、後期の群集墳成立の前提となったともいわれる。比自岐盆地は、古墳や包蔵地の分布状況から全体として北側の開発が先行し、南側は相対的に遅れたと考えられる。馬場西遺跡において５世紀後葉から竪穴住居が認められる現象は、分村の結果とも想定できよう。もし分村とすれば、親村は盆地北側に存在した可能性は大いにあろう。南側丘陵上の円墳群の少なくともその大部分は後期群集墳と考えられる。馬場西遺跡に南接する丘陵上の古墳群も、当遺跡の集落形成と密接な関係が想定される。この古墳群は全て円墳で構成され、特に突出した規模のものは見られないが、あるいは馬場西遺跡では倉庫や特に有力な建物が認められなかった事実に対応するものであろうか。馬場西遺跡は、少数もしくは単数の世帯共同体で構成され、剰余生産物の処分権を持ち得ず、再生産の単位は他集落との関係において想定されるべき集落であっただろう。

７世紀代にも細々と居住地として利用されていた事がＳＢ４等の竪穴住居によって知られる。ところが、天平20(748)年拓殖郷における家屋は掘立柱建物である。竪穴住居から掘立柱建物への変遷は、畿内中心部では奈良時代にほぼ完了し、三重県地方でも大差ないものと推定されているが、伊賀地方における具体例を加えたわけである。

奈良時代から鎌倉時代にかけては、製塩土器や緑釉陶器をはじめとして各時代の遺物は出土しているが、１棟の掘立柱建物以外に顕著な遺構はなく、当時の遺跡の性格は不明な点が多い。

3　集落の廃絶以後

５世紀中葉以前の馬場西遺跡は、生活圏に属していてもまだ居住地ではなかったと考えられる。５世紀後葉から６世紀中葉にかけては、住居が次々と造られ、当遺跡においてはおそらく最も人口の多い時期であったろう。しかし、この集落は小規模であり、近接集落との関係において従属的であった可能性が高かろう。やがて６世紀後葉以降、人影はまばらになるが、竪穴や掘立柱建物が細々と建てられ、平安時代頃には製塩土器や緑釉陶器という一般には入手が困難なものもあり、神宮等の荘園経営の事実と合せて当時の集落の性格には興味深いものがある。

中世になって間もなく集落は移動し、その後この地にはわずかな墓が営なまれただけの寂しい所であっただろう。墓は六文銭を副葬した北首西顔の臥屈葬であるが、火葬土坑をそのまま墓坑とし、しかも群在しないという珍しい例である。六文銭が判読不能であり、時代が明らかでないが、六文銭の副葬から中世後期から近世初期に属するものであろうか。付近には墓石は見られないが、蔵骨器とも考えられる壺(48)や香炉片(75)も出土している。

やがて墓も忘れ去られ、田や畑として利用されるようになって現在に至り、圃場整備によって一見大きな変貌を遂げているようであるが、その区画には条里の遺制も読み取られ、歴史の生きている事が知られる。

（山田　猛）

〈註〉

① 宇佐晋一「三重県上野市才良遺跡概報」『古代学研究』12　1955

② 小林行雄「三重県石山古墳調査略報」『日本考古学協会第八回総会研究発表要旨』 1951

③ この外に前方後円墳の可能性がある地点が盆地東方に１ヶ所知られている。

④ 同様な現象は、比土付近を基盤とするらしい美寮古墳群についても指摘されている。
森浩一、森川桜男、石部正志、田中英夫、堀田啓一「三重県わき塚古墳の調査」『古代学研究』66　1973

⑤『平安遺文』第165号文書

⑥『平安遺文』第763号文書

⑦ 福永正三「伊賀国の条里制」『伊勢湾岸地域の古代条里制』 1979　福永正三氏の御教示によるところが大きい。

⑧「神鳳鈔」『群書類従』

⑨ 現存寺院以外に、御幣寺、阿弥陀寺(字長盲寺所在)、戒蔵庵、不動寺、峯之堂、蓮生庵等の名が知られている。

⑩ 太田古朴『仏像と五十年』１　1979

⑪ 伊藤博幸「「ヘラキリ」と「ヘラ起し」と「糸切り」」『古代学研究』66　1973　等の論考があるが、ここでは「ヘラキリ」と「ヘラオコシ」をあえて区別せず「ヘラオコシ」とした。

⑫ 平安学園考古学クラブ『陶邑古窯址群Ⅰ』 1966

⑬ 近藤義郎『小海』 磯部町教育委員会　1976　伊藤保氏等の御教示も得た。

⑭ 稲垣晋也「法隆寺出土資料による羽釜の編年」『大和文化研究』７－７　1962

⑮ 横井勇氏の御協力を得た。

⑯ 小笠原好彦「丹塗土師器と黒色土師器」『考古学研究』70・71　1971

⑰ 中森英夫、山田猛、山本雅靖『下郡遺跡発掘調査報告』 上野市教育委員会、上野市下郡遺跡調査会　1978
山田猛『下郡遺跡試掘調査概報』 三重県教育委員会　1979

⑱ 小玉道明氏の御教示によれば、煎熬時に用いたものならば損耗が激しかったと考えられるが、「製塩遺跡」からの出土量は必ずしも多量ではないという。
近藤義郎「土器製塩と焼き塩」『考古学研究』87　1976

⑲ 近藤義郎、渡辺則文「製塩技術とその時代的特質」『日本の考古学　Ⅵ』 1967

⑳ 沖島卯之「三重県田中遺跡出土の瓦器と緑釉土器片」『古代学研究』15・16　1956

㉑ 中森英夫、山田猛、山本雅靖『下郡遺跡発掘調査報告』 上野市教育委員会、上野市下郡遺跡調査会　1978

㉒ 輕池北遺跡調査会『輕池北遺跡発掘調査報告』 1977

㉓ 谷本鋭次、吉水康夫、駒田利治、山田猛『北堀池遺跡発掘調査概要Ⅱ』 三重県教育委員会　1979

㉔ 都出比呂志「農業共同体と首長権」『講座日本史　１』 1970

㉕ 都出比呂志「農具鉄器化の二つの画期」『考古学研究』51　1967
八賀晋「古代における水田開発」『日本史研究』96　1968

㉖ 馬場西遺跡南丘陵上の円墳中、丘陵頂部に位置するやや大型の円墳が最近盗掘されたが、この際に円筒埴輪片や須恵器片が出土しており、当遺跡の集落形成期と時期的に一致する。

㉗『寧楽遺文　下』小治田朝臣薬麻呂解

㉘ 横山浩一「村のくらし」『古代史発掘　10』 1974

参考文献

上野市『埋蔵文化財第一次調査報告』 1978

早瀬保太郎『伊賀史概説』 1973

和田忠臣『伊賀国編年史料』 1978

福永正三『秘蔵の国』 1972

白石太一郎「いわゆる瓦器に関する二・三の問題」『古代学研究』54　1969

安達厚三、木下正史「飛鳥地域出土の古式土師器」『考古学雑誌』60　1974

和島誠一、金井塚良一「集落と共同体」『日本の考古学　Ⅴ』 1966

金井塚良一「関東地方の方形周溝墓」『考古学研究』72　1972

佐々木達夫「古代村落の変遷過程」『原始古代社会研究　１』 1974

高橋一夫「和泉、鬼高期の諸問題」『原始古代社会研究　２』 1975

鬼頭清明「八世紀の社会構成史的特質」『日本史研究』172　1976

広瀬和雄「古墳時代の集落類型 ── 西日本を中心として」『考古学研究』97　1978

圭室諦成『葬式仏教』 1977

斎藤忠『墳墓』 1978

PL I

比自岐盆地航空写真

調査前遠景（E→W）

調査前遠景（N→S）

調査中風景

調査・圃場整備後遠景（N→S）

PL.2

調査区主要部全景（W→E）

調査区主要部（E→W）

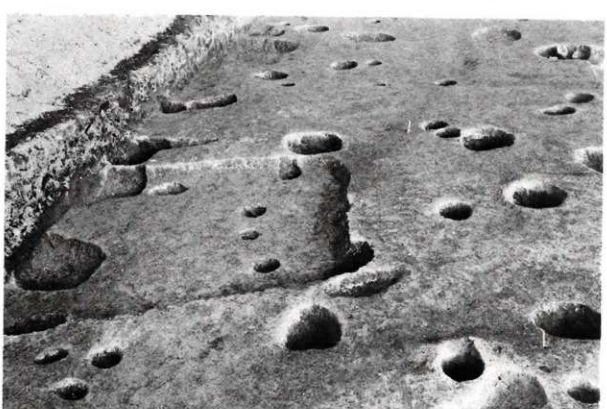
PL3

上　SB1・2（N→S）　下左　SB2 貯蔵穴　下右　SB2 遺物出土状況

SB3（W→E）

PL4

SB4 (N→S)



SB5・13 (W→E)

PL5

SB6・7 (N→S)

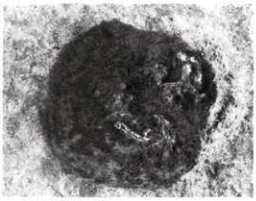
SB8・9 (N→S)

PL6

SB10·11 (W→E)

SB12 (S→E)

SB12 遺物出土状況



SX24(S→N)

PL7

101

204

201

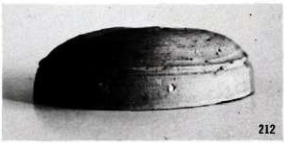
203

206

207

210

211


212

213

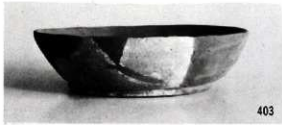
214

401

402

SB1(101)　SB2(201・3～7・10～14)　SB4(401～2)　(1:3)

PL 8


403

404

405

601

602

609

802

904

905

906

907

908

SB4(403～5)　SB6(601～2・9)　SB8(802)　SB9(904～8)　(1:3)

PL 9

1001

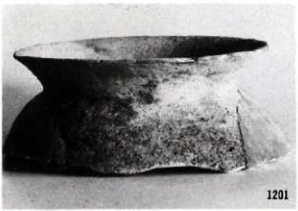
1004

1006

1014

1018

1203


1201

1202

1204

1205

SB 10(1001・4・6・14・18)　SB 12(1201～5)　(1:3)

PL10

SB12(1206～8)　SD16(1)　SD19(3)　SK26(7)　SK22(9・11)　(1:3)

PL II

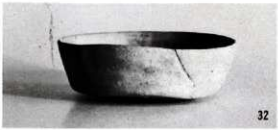
17

18

23

25

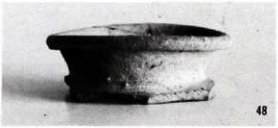
28


32

45

46

47

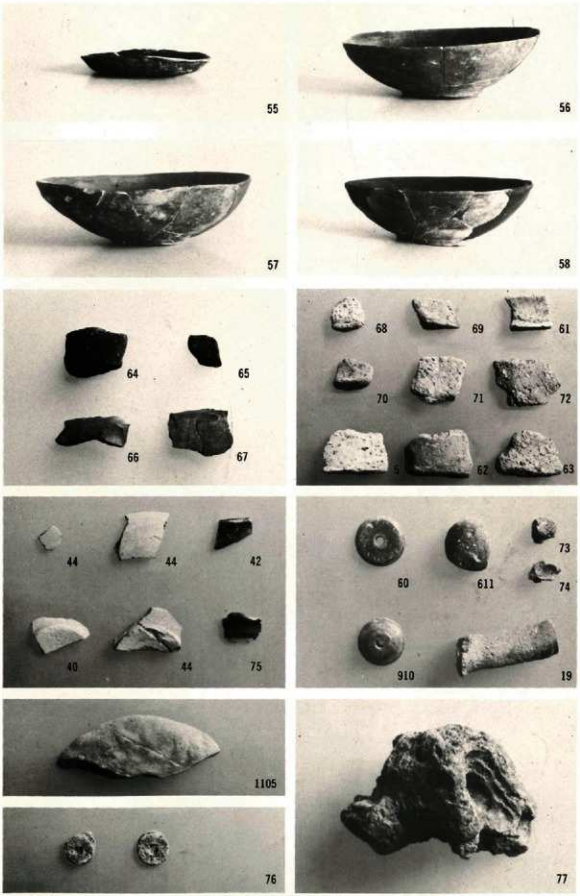

48

53

54

SK23(17)　SK30(18)　SK34(23)　補足調査区A(25・28・32)　調査区主要部(45～48・53～54)　(1:3)

PL12



調査区主要部(44・55～72)　SK27(5)　補足調査区F(40・42・75)　SK31(19)　SK25(73－4)
SB6(611)　SB9(910)　SB11(1105)　SK24(76)　表面採集(77)　(1:3)